

新型コロナウイルス感染症に対する個々人の意識づけ向上のために（留意事項）

新型コロナウイルス感染症(以下「コロナ」という)予防における密接回避の重要性を意識する。

① コロナの危険性意識

[ウイルス]

自分自身で増えることはできないが、粘膜などの細胞に侵入して増える。健康な皮膚には入り込むことができず表面に付着するだけ。物の表面についたウイルスは時間がたてば壊れる。

[感染過程]

一般的には飛沫感染、接触感染で感染する。近距離で人と会話するなどの環境では、咳やくしゃみなどの症状がなくても感染を拡大させるリスクがある。

[感染可能性]

発熱等の症状が出る二日前から高い感染力を保持している。特記すべき点は、無症状ウイルス保持者からも感染する。なお、発熱など風邪症状以外では倦怠感、味覚・嗅覚障害、筋肉痛などの多彩な症状がある。

[感染による危険性]

無症状者や軽症者であっても数か月単位で発現する後遺症が報告されている。65歳以上の高齢者や基礎疾患(糖尿病、心肺疾患、がんなど)のあるものが感染した場合には重症化しやすい。

[感染力]

乾燥や低温下において感染力が高まる。更に手洗いやマスクをするなどの対策をしても感染が広がる感染力を有している。(インフルエンザとの比較による)

一般的に、感染症は、症状が高度の時期に、他者へウイルスを感染させる可能性が最も高くなるが、新型コロナウイルスは、症状が明らかになる数日(2～5日)前から感染が広がるおそれがある。

[薬等による治療法]

新型コロナウイルスに対する抗ウイルス薬はまだ確立していない。ワクチンについては、改正予防接種法が令和2年12月2日に国会で成立したが、接種開始の時期の見通しは決まっていない。

熱や咳などの症状緩和を目指す治療(対症療法)、解熱剤や鎮咳薬の投与、点滴等が実施されている現状である。特に、重症者には、レムデシベル、デキサメタゾン、トシリズマブなどの薬剤が適応される。

② 個人単位での感染回避

[マスク着用の重要性]

マスクの着用は、感染対策として、ウイルスの拡散予防並びに体内への吸入予防効果があるため、人と会話等を行う場合にはマスクを着用することが必要となる。特に不織布の使い捨てマスクの効果が高い。

[ソーシャルディスタンスの確保]

マスク等の着用がない場合に人と会話する際は、人との距離を出来れば2メートル(最低でも1メートル)確保すること。

③ 集団感染(クラスター)回避の重要性意識

[「三密」(密集、密閉、密接)]

密集「人が密に集まって過ごすような空間」

密閉「換気が悪い場所」

密接「不特定多数の人が接触する場所」「近い距離での会話」

※三密のうち1つの密の場面でも集団感染のリスクは存在する。

[追跡調査]

感染の拡大を最小限に抑えるためには、小規模な患者の集団(クラスター)が次の集団を生み出すことの防止であり、保健所による感染経路の追跡調査に適切に協力することが重要である。

④密接回避の重要性意識

[感染リスクが高まる「5つの場面」の意識]

コロナの伝播は、主にクラスターを介して拡大するので、クラスター分析の知見から、感染リスクが高まる「5つの場面」がまとめられた。

場面1：飲酒を伴う懇親会等

場面2：人数や長時間に及ぶ飲食

場面3：マスクなしでの会話

場面4：狭い空間での共同生活

場面5：居場所の切り替わり

⑤本学で既に定めた詳細な感染対策

大学等におけるキャンパスでの授業実施等に向けたガイドライン

- ・感染防止の基本的事項（「新しい生活様式」に基づく共通事項）
- ・徹底すべき事項について(1)マスク着用(熱中症対策を含む)(2)感染防止の基本事項遵守の大学構成員への周知(3)体調不良時の対応(4)換気の徹底)
- ・キャンパスへの入構者数の調整
- ・入構を認める者への事前周知
- ・キャンパスの出入口における対策
- ・授業における対策
- ・各種学生支援を再開する場合の対策
- ・学生生活への対応
- ・共用施設の衛生・清掃強化等
- ・備品の確保
- ・衛生主管部局との連携
- ・自宅待機及び解除の基準

⑥行動履歴・健康状態の記録の重要性

[健康観察の重要性]

発熱以外にも多彩な症状があるため、常日頃から自身の体調に意識を向け、その変化を把握しておくことが重要である。

[行動記録の重要性]

コロナは、感染から発症まで約2週間程度のタイムラグがあるため、自身の重要な活動(帰省、入試、病院実習、教育実習、介護体験等)に合わせた事前の行動記録を時系列で把握しておき、感染の危険を高めるような行動の抑制に繋げる。

行動履歴・健康状態の記録は、(1)どこから感染したか、(2)誰かに感染させてないかを把握することができ、感染拡大を防ぐことにつながる。

感染が判明し、これまでの行動履歴・健康状態の調査等が行われた時に、正確な情報が迅速に提供できる。感染経路が特定しやすくなり、感染拡大防止に役立つ。

「日本大学健康観察システムによる健康管理」

各自がパソコンやスマートフォンから、体温や体調を記録することで自分自身の健康観察を行い、体調不良時に入校の可否を判断するシステム。当日の主な行動をチェックしておくことで後日確認することができる。

令和2年12月23日
日本大学商学部